2023年度

ACEFスタディツアー

報告書

目次

・スタディツアーメンバー紹介 ・・・・・・・・ p.3
・BDPスタッフ紹介 ・・・・・・・・・・・・・・・ p.5
・スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.8
・バングラデシュについて・・・・・・・・・・・・ p.10
・ACEF・BDPについて・・・・・・・・・・・・・・ p.11
・学校訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.12
・マイクロファイナンス（MF）について・ p.15
・Taize（テゼ）訪問・・・・・・・・・・・・・・・・ p.16
・女性クラブ訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.17
・L'Arche（ラルシュ）訪問 ・・・・・・・・・・ p.18
・CulturalShow・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.19
・購入品・お土産紹介・・・・・・・・・・・・・・・ p.20
・食事紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.21
・ベンガル・日本語録・・・・・・・・・・・・・・・ p.24
・参加者感想 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.25
・寄せ書き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p.43

スタディツアーメンバー紹介

やまじゅんさん
我らがツアーリーダー！トークの面白さと歌のうまさに磨きがかかっていた。思わず「先生」と呼んでしまうほどに場をまとめるのが上手で、今回のツアーを円滑に進めてくれた。

さつきさん
さすがACEF事務局長というべきか、英語の通訳など様々な場面で助けていただいたし、ツアーメンバーとのコミュニケーションも上手で、思わず会話が弾んだ！

すーさん
伝承遊びのプロ。バングラデシュの方々にけん玉やコマで盛り上げてくれた。シェアリングでは率先して場をまとめてくださった様子には、小学校の先生だなと垣間感じさせられた。

りなさん
言葉選びが優しく、いつも相手を傷つけないよう思いやる気持ちが滲み出ていたように感じる。なのにトークが面白く、話題を広げるのが上手。たまに出る方言がめちゃくちゃ可愛い。

あすみさん
バングラデシュ3回目の先輩！言語の壁をものともしないような、意欲的かつ積極的にコミュニケーションを取りに行く姿勢が見られ、畏敬の念を抱かずにはいられない。

たかしくん
色んな人と写真を撮ったり、メンバーともバングラデシュの方々とも積極的に関わっていた人気者。常に皆の意見に寄り添ってくれたし、車の中でも全力で一緒に盛り上がってくれた。

ゆうきさん
関西出身ゆえのおしゃべりの多さと面白さで皆を率先して盛り上げてくれた。かと思えば、相談してみると的確なアドバイスをくれる真面目な一面に思わず脱帽。

しおんさん
しっかりと個があり、シェアリングの中では、自分の経験を通しての学びや違った視点の意見を共有してくれた！インスタライブなど広報担当としてもたくさんのはたらきをしてくれた。

めいさん
意見を常に受け入れてくれて、時に一緒に盛り上がってくれる親しみやすさがあった頼りがいある存在。シェアリングでは、疑問に思ったことを沢山出してくれて有意義な時間をくれた。

ゆかりちゃん
おしゃれな帽子とサロワカミューズで着飾っていた高校生マダム。恋多き女故に、度々恋バナで場を盛り上げてくれた。シェアリングでも、真っ直ぐな意見に感心したし、励まされた。

ゆう
大人っぽくクールな雰囲気もあるが、くだらないことで一緒に大笑いして盛り上がったりととても親しみやすい。人と違う意見や恐れずまっすぐ言う姿勢は見習いたい。

みこと
誰とでも丁寧にコミュニケーションを取る姿が印象的だった。自分の意見を言語化するのが上手で、シェアリングでも的確な言葉選びを目の当たりにして、思わず唸らされた...!

りょうこ
マイペースでおしゃべりな一面で、場の空気を和ませる天才。車の長い移動が何度もあったが、その疲れを吹き飛ばしてくれる抜群の面白さ！正直なところ、一家に一人ほしい。

ゆっこ
コミュ力がピカイチで、誰とでもすぐ仲良くなれる友達作りのプロ。他人を常に尊重してくれる優しさがありながらも意見をしっかりと持っていて、思わず尊敬の眼差しを向けてしまう。

あやね
共感力の天才。誰かが思い悩んでる時は共に考え、楽しい時は共に盛り上がる。芯のある発言をしつつ、常に相手の視点に立って話してくれる姿には感謝と憧れでいっぱいである。

なべちゃん
人を思いやる気持ちの具現化といえるほどの優しさの持ち主。最初は人見知りなところがあったが、実際にはとても面白くて、意見もしっかりしていて話してて楽しい！

さいか
メンバー最年少の高校一年生。物静かで大人っぽいのに、垣間見える好奇心旺盛なところがギャップでたまらない。マイペースでおっとりしている一面が母性をくすぐる妹的存在。

スタッフ紹介

DHAKA OFFICE

ディコさん
BDPのIT担当。BDPスタッフさんの中では塩対応気味（やまじゅんさん曰くかっこつけてる）が、リアクションが大きくてかわいい。日本に留学していたこともあり、アンジェラアキの「手紙」がお気に入り。

アンブロスさん
優しく私達を見守って下さるお父さん的存在。はじめは寡黙な人だと思っていたが、話しかけると笑顔になって下さるギャップにやられるメンバー多数。お土産にベンガルティーを頂いた。

ヘモントさん
彼が歌い出せば誰でもその美声にうっとり。様々な楽器を演奏して私達を楽しませて下さった。ダッカオフィスを所有していたり名刺に書いてある経歴がすごい人。

シルビアさん
おっとりしていて愛らしいダッカのお姉さん的存在。拙い英語で話しかけても、うなずきながら話を聞いてくださりその優しい眼差しに心が温まる。

カディジャさん
BDPのおしゃれ番長。カルチャーショーでは私達にシャリーの付けをしてくださり、何度も「シュンドル」（かわいい）と声をかけて下さった。

PUBAIL OFFICE

ラハジさん
静かに微笑みながら、バングラデシュで流行の音楽（特に失恋ソング）を教えてくださる。カルチャーショーでは10歳の双子の娘さんを連れてきてくださり、美しいヘナタトゥーを施してくれた。

オモルさん
オモルさんの口から発せられる日本語でたちまちみんな笑顔に。カルチャーショーではご家族で楽器を奏でてくださり、場を盛り上げてくださった。

プロカッシュさん
白い歯で二カッと笑いながらベンガル語などわからないことを聞くと教えて下さるプーバイルの優等生。かと思いきや最終日のルンギダンスでは一番ノリノリの姿を見せてくれた

タバジョさん
ベンガル語が話せない私達の言いたいことを最後まで真剣に聞いて下さる優しいナイトガードさん。はじめは接し方に戸惑ったが、思いが通じたときそこには言語の壁を超えた感動があった。

アリさん
モジャ(おいしい)と伝えると素敵な笑顔をみせて下さる。ムリというお米を揚げたポン菓子のようなバングラデシュ料理をいただいた。(辛くなかった！)

ニキルさん
甘いスマイルとは裏腹にクラクションを鳴らしながら逆走する豪快なドライバーさん。渋滞にハマった私達にお菓子を買ってくださった。

シッラさん、ラッキーさん、ラシダさん
キッチンで私達の食事を作ってくださったお姉様方。ツアーメンバーもルティ（小麦でできた薄いナンのような食品）を作るお手伝いをしたがなかなか丸く伸びず、上手くできなかった(涙)　暑い中、毎日美味しいカレーを作っていただきありがとうございました！

JAMALPUR　OFFICE

ロチョンさん
ガロ族出身で職業訓練校の自動車科の先生。バイクが大好きでテゼへ向かう時は、バイクで道案内してくれた。SNSで人を募って頻繁にバイクの物々交換をしているとか、、、

モタレフさん
ジャマルプールでの私たちの身の回りお世話をしてくださった。空の水筒片手にもたもたしていたりすると、すぐに来て水を入れてくださったりと、親切にしていただいた。

モクレスさん
太鼓を叩きながら合いの手を入れてくださるジャマルプールのムードメーカー。お別れの挨拶では私達のことを気遣ったあたたかい言葉を投げかけて下さった。

ホビさん
ベンガル語でのお話が大好き。話かけると喜んで答えて下さった。夜に奥さんに電話する愛妻家。（家族とTV電話をしているスタッフを沢山見たのでバングラデシュでは普通なのかも）

THANK　YOU

今回のスタディーツアーが成立したのは多くのBDPスタッフの方々が様々な準備や私達のサポートをしてくださったからです！そんな優しさに溢れている大好きなBDPスタッフさん達にめいいっぱいの感謝の気持ちを込めて

ধন্যবাদ（ありがとう！）

SCHEDULE

8 TUESDAY

22時頃… 羽田空港 集合
0時頃… 羽田✈バンコク

9 WEDNESDAY

5時頃… バンコク着
10時半頃… バンコク✈ダッカ
12時頃… ダッカ着 プーバイルオフィスへ
15時頃… プーバイルオフィス着
開会礼拝・昼食
夕方… オフィス周辺を散策
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

10 THURSDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… オリエンテーリング
昼… 昼食
午後… CHAMUDDHA BDP SCHOOL 訪問
ミリールバザールで買い物
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

11 FRIDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… ジャマルプールへ
昼… 昼食
午後… テゼ訪問（交流・礼拝・夕食）

12 SATURDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… WEST BASHCHARA BDP SCHOOL
BOITHAMARI UTTARPARA
BDP SCHOOL 訪問
昼… 昼食
午後… マイクロファイナンス活動訪問
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

13 SUNDAY

朝… ボクシガンジへ（車内で朝食）
午前… DIGOLKONA CHURCHで礼拝
付属学校訪問
昼… 昼食@ボクシガンジオフィス
午後… SURZONAGAR BDP SCHOOL訪問
夜… 夕食、夕礼拝、
スタッフと楽しいひととき♪

14 MONDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… マイメイシンへ
BDPろうあ学校訪問
女性クラブ・ラルシュ訪問（昼食）
午後… プーバイルへ
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

15 TUESDAY (HOLIDAY)

朝… 朝礼拝、朝食
午前… ダッカで買い物
昼… 昼食
午後… オフィス周辺の教会散策
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

16 WEDNESDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… BANIABARI BDP SCHOOL
SAMORSINGH BDP SCHOOL 訪問
昼… 昼食@MITUさん宅
午後… マイクロファイナンス事業訪問
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

17 THURSDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… ダッカへ
LALKUTHI BDP SCHOOL
MONIPUR BDP SCHOOL
訪問
昼… 昼食@ダッカオフィス
午後… プーバイルへ
夜… 夕食、夕礼拝、シェアリング

18 FRIDAY

朝… 朝礼拝、朝食
午前… ラップアップディスカッション
昼… 昼食
午後… ヘナタトゥー・民族衣装試着
カルチャーショー
夜… 夕食、夕礼拝、
スタッフと楽しいひととき♪

19 SATURDAY

朝… 朝食・閉会礼拝
8時頃… 空港へ
13時半頃…ダッカ✈バンコク
17時半頃…バンコク着
23時頃… バンコク✈羽田

20 SUNDAY

7時半頃… 羽田着
8時半頃… 解散

バングラデシュについて

飛行機の搭乗時間、約10時間。直線距離は約4800km。まさに未知の国「バングラデシュ」。スタディツアーの詳細へと入る前に、一体どんな国かを紹介したいと思う。

バングラデシュは、南アジアに位置する、インド・ミャンマーと国境を接する国である。公用語はベンガル語。国旗は日本と同様「日の丸」で、親近感を抱かざるをえない。
人口密度が高いことで有名で、日本の4割程の国土に約1億7000万人が暮らしている。特に、デルタ地帯に人口が密集しており、熱帯モンスーン気候による雨季やサイクロン、河川の氾濫などが要因の浸水もしばしば。

出典:外務省ホームページ

元々は、インドの一部であったバングラデシュ。
1947年にイギリスから独立する際、ヒンドゥー教が主体のインドと別に、イスラム教徒が大部分を占めていた「パキスタン」として独立。1971年、更にベンガル人が大多数である地域であった「東パキスタン」が独立を果たしたことにより、「バングラデシュ」となった。
今、イスラム教徒が約88％と多数派を占めるのも、このような歴史があったからである。

長らく「アジア最貧国」という認識を持たれていたバングラデシュだが、近年著しく経済成長を遂げ、貧困率や識字率はかなり改善へと向かっているのが実情である。
また、1990年に初等教育(1～5年生)が義務化され、初等教育純就学率はほぼ100％に達している。その背景にあるのが、「ノンフォーマル教育」だ。ACEFやBDPのようなNGOなどのはたらきにより、さまざまな家庭に初等教育は広がり、職業訓練校でよりよい仕事に就くためのスキルを身につけることが可能となった。

地理や歴史だけでなく、実際に肌で感じた文化にも注目したい。
まずは交通量。信号はなく、四方八方からクラクションが鳴り響く道路。自動車や人、野生の動物までもが忙しなく行き交っている。そして、行き交う人から向けられる「なんだあの人たちは…」という視線。手を振れば笑顔で反応してくれるフレンドリーさ。
また、「右手は清浄の手・左手を不浄の手」という考えを持つバングラデシュでは、食事はもちろん箸ではなく、スプーンやフォークでもなく、基本的には右手のみ使っていただく。物を渡すときやお手洗いなどの文化も同様である。
そんな環境や文化から、じわじわと感じる「異国に来たぞ！」という緊張感。そのドキドキとワクワクを、以下の報告からダイレクトに感じていただければと思う。

ACEF・BDPについて

ACEF(エイセフ）とは

特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金（The Asia Christian Education Fund: ACEF）は、1990年に設立された国際協力NGO・NPO法人であり、キリスト教精神に基づいてバングラデシュの子どもたちの初等・中等教育支援と職業訓練のための支援協力を行い、教育・福祉の向上に貢献してきた。また、開発途上国の諸問題に取り組む日本の若者の育成を行い、我が国の国際協力教育の促進を図ることを目的としている。

ACEFのSNSはこちらから→

BDPとは

ACEFのパートナー団体であるBDP（Basic Development Partners)は1990年に設立された国際NGO団体である。
「すべての子どもに読み書きを」を理念に、現在は首都ダッカのスラム地区と農村の6地区で42校のノンフォーマル小学校を運営し、3500人強の生徒が学んでいる。また、女性を積極的に教員として採用したり、女性対象のマイクロファイナンスも展開している。他にも職業訓練校やヒアプロジェクト（聴覚障がいを持つ子に補聴器などの訓練をさせ、通常の学校に入れるように支援するもの）を運営したりと、子どもと女性を積極的に支援している。

学校訪問

8/10 Chamuddha BDP School

教室での交流の後、校庭に出るとなんと男の子が自作の詩を朗読して歓迎してくださった。帰り際には飴をくれたり折り紙に興味を持つ子どもの姿が見られ、最初の学校訪問でお互い緊張していたが、別れが名残惜しくなるほど仲良くなれた。

8/12 West Bashchara BDP School

訪問日が土曜日だったため本来授業はなかったが、私達のために多くの子ども達が花を持って学校に集まって歓迎して下さった。子どもたちとは芝生の上で縄跳びやサッカー、折り紙などをして中を深めた。交流を楽しんだ後にはフルーツをごちそうになり、バングラの人々の温かい人柄に触れる経験となった。

8/12 Boithamari Uttarpara BDP School

私たちのためにたくさんの人たちが集まってくださり、二人の少女が可愛らしいダンスで迎えてくださった。また、たくさん写真をとってくれたり、少しばかりベンガル語を話すと、「ベンガル語がわかるの！？」と驚きつつ喜んでくださった方もいて、楽しくコミュニケーションを取ることができた。

8/13 Surzonagar BDP School

国旗と同じ色である、赤と緑の可愛らしい制服が特徴的！たくさんの飾り付けであたたかく歓迎してくださった。悪天候が続き足元の悪い中、村の方々もたくさん集まってくださり、ダンスや歌で盛り上がった。最後に、謎の泡で歓迎してくれた少年のことも忘れられない…。

8/14 Deaf and Dump School

聴がい障害のある子どもたちのためのろうあ学校。先生が単語と絵のかかれたカードを見せて言葉の練習をさせており、ベンガル語を知らない私達にとっても良い勉強となった。短い時間しか滞在することはできなかったが、生徒の皆が名残惜しそうにしていて嬉しさと寂しさを感じた。

8/16 Baniabari BDP School

ヒンズー教の村にある学校。就学前教室も併設されており、はじめ小さな子ども達は緊張していたようだが、打ち解けると私達に興味津々な様子が愛らしかった。屋根の老朽化で雨漏りに悩んでいたところ、日本企業の支援で修復されたそう。緑色が美しい新しい屋根を通してバングラデシュと日本の関係を感じた。

8/16 Samorsingh BDP School

図書室が併設されている小学校。最後に全員で廊下に出て「幸せなら手をたたこう」を踊った。狭い空間ではあったが、その分互いの目を見ながら接することができ満ち足りた時間を共有できた。大雨で靴が壊れたメンバーに先生から靴を貸して頂いたり、雨宿りさせて頂いた場面も。ありがとうございました！

8/17 Lalkuthi BDP School

スラム地区の横にある小学校。写真は5年生の理科の授業風景で生物の進化過程を勉強していた。熱心に勉強する子どもたちが多く、授業後に私たちに教科書を見せながら説明をしてくれた。最後には全員で校庭に出て日本語で「幸せなら手をたたこう」を披露していただき積極的な生徒が多い印象を受けた。

8/17 Manipuri BDP School

住宅街の中にある小学校。コンピューター科と縫製科の職業訓練校が併設されていて、縫製科の先生は山梨で働いていた経験があるそう。子どもたちは絵のプレゼントを用意して歓迎してくださり「大きな栗の木の下で」を日本語で披露していただいた。帰り際に手を振り続けてくれた子のことが忘れられない。

マイクロファイナンス(MF)について

マイクロファイナンス（MF)とは

小規模の貸し付けや貯蓄・送金などの金融サービスを指す「マイクロファイナンス」は低所得者層の事業を支援し自立を目的とする仕組みとして活用されている。
BDPでも2020年にBDPスクールの生徒の保護者や先生、いずれも女性を対象にマイクロファイナンスを開始した。女性を対象としたのには、家庭内での女性の地位を向上するためである。貸出額は人によって異なり、今回話を聞いた中では1万タカ～2万タカでの貸出範囲であった。事業例も多くあり、中にはグループを組んで事業を行う者もいた。
今回はその中でも伝統衣装（サロワカミューズ）を作り店に提供する事業と、養魚場を営む事業を見学させてもらった。また、マイクロファイナンスを利用しているBDPスクールの保護者や先生からもお話を聞く機会があった。

農村にてバングラデシュの伝統衣装である「サロワカミューズ」を製作し、服屋へと提供しているグループ。綺麗な刺繍には約15日かかるという。しかし、トップス・パンツ・スカーフの3点セットで服屋へと提供する値段は500タカ（約670円）であり、なかなかこの仕事一本では食べていけないのが現状である。BDPのマイクロファイナンスを利用して主に糸代などを補填している。

養魚場を営んでいるグループではマイクロファイナンスからのお金を主にエサ代などに充てている。
事業を始めた当初は1つの池からスタートしたが、今では5つの池にて養魚している。養魚の知識は政府の専門のスタッフから教えてもらえるそうで、現在ではスタッフなしでも運営できるほどになった。

16日にシャモシンBDPスクールを見学した後、BDPのマイクロファイナンスを利用しているシャモシンスクールの保護者や先生たちに話を聞いた。シャモシンスクールでは37名がマイクロファイナンスを利用しており、その内グループは7組いた。用途も様々であり、食料品店の資金にする者や渡し船に利用する者、中には貯金だけする者もいた。てっきりビジネスだけの利用だと思っていたが、将来の安心へのためにも貯金を目的にマイクロファイナンスを利用する者もいるという。

Taise（テゼ）訪問

8月11日Taize(テゼ)に訪問した。テゼでは、十数人の青年たちと国籍の違うブラザーたちが共同生活をしている。テゼの敷地内では、ジャックフルーツや、パイナップルなどの栽培などを行なっており、自給自足的な生活を営んでいた。

テゼの青年達との交流では自分の名前を私達はベンガル語でテゼの青年達は日本語で自己紹介できるように教え合いました！

～テゼ訪問で感じたこと～

テゼでは毎日礼拝をおこなっているが訪問した日には週に1回の教会で行う礼拝に参加させてもらうことになった。教会の中では全員が集中してお祈りをしており、その姿はとてもきれいなものであった。このテゼで最も印象に残ったものがこの礼拝である。この礼拝ではテゼで生活している青年たち、テゼでの生活にリーダーシップを持って行動している国籍がバラバラの方たち、またこのツアーに参加している私達、みんな見た目や性別、国籍はバラバラであった。だが、この礼拝の時は同じ時間、同じ場所で同じ事柄について考えるという状況に、凄まじい一体感を感じた。

女性クラブ

8月14日この日は、女性クラブに訪問した。女性クラブはラルシュと同様で、テゼのブラザーが立ち上げたものである。この施設は日本人が多く関わっており、JOCSの方達や、井戸端基金の方達などから金銭的援助を受けているだけではなく、デザインや理学療法を教わり活かしている。

　また、ヒアプロジェクトなどの障がい者支援団体とパートナーシップを組み、ハンディキャップを持つ人達に働く場所を設けているということだった。

女性クラブではこのようなとてもきれいな刺繍を施した肩掛けバックや、枕カバー、小物入れなどがありとてもきれいでした！

女性クラブでは一緒にランチをいただきました。ここでのランチではジュートの炒め物を食べ、少しの苦味がとても美味しかったです！また、ナスの揚げ物や、魚の揚げ物もでており美味しかったです！

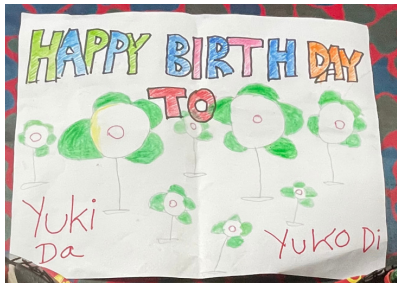
L'ARCHE 訪問

私たちは14日に、マイメンシンにあるラルシュを訪れました。ラルシュとは知的障がいを持った方と持っていないアシスタントと呼ばれる方が共に暮らす共同体です。バングラデシュのラルシュは2人の男性から始まり、今では18人のアシスタントを含め異なる宗教の人々が共に生活をしています。

私たちはまず初めにゴートムさんからお話を聞きました。その中で私はとても印象に残っている部分があります。それは「僕たちアシスタントは彼らを助けているのではなく、自分達も彼らから色々なことを学んでいる」という部分です。日本の福祉は支援者と要支援者と考えられていますが、ここではお互いに友達と接しているような様子が伺えました。私はそんなアットホームな雰囲気のラルシュに感動しました。

実際に作業場を見学し、作品を購入しました。ビーズや絵画、キャンドル、刺繍などそれぞれが得意な分野で活動しており、写真のように一つずつ手作業で作っていました。どれもが唯一無二の商品なのでどれを買おうか悩んでいると、「これ、私が作ったの」と話しかけてくれる方もいました。彼らから直接購入できることは、購入時に生産者の笑顔が見れることができとても心が温まりました。

その後、お昼ご飯を一緒にいただきました。歌や首飾りで歓迎してくれました。当日お誕生日だったスタツアメンバーの2人もプレゼントや歌でお祝いしてもらい、ここでもラルシュの温かみを感じることができました。2人にとっても忘れられない誕生日になったと思います！歌を歌っている間手をずっと握ってくださった方、食事中に「新しい服を買ったんだ」と教えてくれた方、片付けの時に手を引いて場所を教えてくださった方などたくさんの出会いがありました。このスタツアの中でも記憶に残る経験となりました！



Cultural Show

帰国前夜はBDPスタッフのご家族と最後の宴を開催！まずはBDPスタッフのお子さんたちが私たちの手に「ヘナタトゥー」を施してくれました。
次に女子はシャリー（サリー）を着ておめかし！
素早くシャリーを着付けてくれて、あっという間に完成です。
なにせ12人の女子を着付けしないといけないので、BDP　Schoolの先生方は大変だったと思います…。
そんな忙しい時でも丁寧にシャリーを着たうえでの歩き方を教えてくださり感謝でした。

ヘナという植物を成分に描かれる「ヘナタトゥー」下描きなしにスラスラと描きます。デザインも自分たちで考えるのだそう…スゴイ！

近所の子どもたちが美しく着飾ってダンスを披露してくれました。

小さなダンサーさんも…！

BDPスタッフ全員での曲も披露してくれました。ヘモントさんお得意のハーモニウムに合わせてみんなノリノリです。
ちゃっかりスタツアメンバーも参加しちゃってます。

最後は近くに家を建設中のサイフルさん（通称：斎藤さん）セレクトの「ルンギダンス」でテンションMAX！
みんな大音量の音楽の中思い思いのダンスで最後の夜を楽しみました！
音楽は国境を超えることを実感しました。
ルンギダンスは帰国後も頭に残るほどの中毒性です…

お土産紹介

～衣類編～

男の子用には、パンジャビとルンギ女の子用にはサロワカミューズがあります！どれも着ていてとても涼しくて着心地が良かったです！

～食べ物編～

食べ物のお土産はスナック菓子が王道！

他にもマンゴーバーを5箱買う人も！

食事

私たちの食事は、シッラさん、ラッキーさん、ラシダさんが毎日用意してくださった。
私たちが起きる前から、粉から1枚ずつ丁寧に作ってくださったルティ（薄いナン）は絶品！朝からみんな何枚も食べていた。私たちも作らせてもらったが、きれいに丸くのばせないし、かまどの前は熱いし…シッラさんたちに心から感謝したい。
調理は片足で固定する包丁を使用。これもまた使いこなすのが難しい。鶏は、鶏冠をとって頭から足先まで調理。命をいただいていることを強く感じた。

バングラでの食事はカトラリーを使わず、右手だけで食べる。手で食べるとすごく美味しい。白いネイルをしていったら、ターメリックで爪が黄色になった人も笑
野菜・魚・エビ・チキン・ビーフ・マトン・ダルなどなど…様々なカレーがあり、毎食カレーを食べていても飽きることがなかった。辛さが苦手なメンバーのために辛さを抑えて調理してくださった。中には唐辛子を丸ごとかじって食べていた強者も何人か…！

マンゴー・パイナップル・バナナ・パパイヤ・グァバ・ザボン・ジャックフルーツなどなど、密輸したくなってしまうほど美味しい果物を毎日たくさんいただいた。

←暑い中飲む熱々のベンガルティーが最高！朝飲んで元気になるのもよし、シェアリングのお供にもよし。
ちなみに、ベンガルティーを飲んで思い出に浸りながら、私はこの報告書を書いている。
甘くていい香りで、ACEFのバザーでも大人気！ぜひ一度お試しあれ。

チャナチュールは昔ながらのバングラのお菓子。ピリ辛でやめられなくなる美味しさ。お店の軒先にはたくさんのお菓子が。
お土産にみんなたくさんのお菓子を購入した。

女性クラブやラルシュ、テゼ、各学校、
訪問先ではたくさんのおもてなしをいただいた。
16日には、BDPスクールの卒業生で現在日本の大学院で研究をしているMituさんのご自宅でのランチにご招待いただいた。すごく豪華なお食事に一同大興奮！

Mituさんがこの報告書作成にあたり、送ってくださったメッセージを次ページで紹介✨

Dear,

I want to take a moment to express my heartfelt gratitude for the wonderful time you had shared during your visit to Bangladesh. Your presence in my home was not just a visit but a beautiful exchange of cultures.

Thank you for embracing our Bangladeshi culture with open hearts, trying our traditional foods, and engaging in conversations that transcended borders. The joy on your faces as you savored our flavorful chicken curry, a symphony of spices gravy, and our crispy, boal fish fry, with a tantalizing blend of spices, was truly heartwarming.

Our egg curry, with its sauce and the shrimp fry, showcasing the freshness of our coastal region, added even more depth to our culinary journey. These dishes, with their unique textures and flavors, offered you a taste of the diverse range of ingredients in Bangladeshi cuisine.

Our selection of vegetables, prepared with aromatic spices, added color and freshness to our table. Each bite was a celebration of locally sourced produce, highlighting the essence of our land.

The sweets, like our melt-in-the-mouth roshogolla and the intricate layers of sandesh, left a sweet imprint on our culinary exchange. For dessert, our delectable malai halwa, a creamy and indulgent dessert, and the fragrant sweets, a twisty, syrup-soaked delight, delighted your taste buds.

Your curiosity and willingness to learn about our culture and traditions touched us deeply. It was a privilege to share our customs and stories with you, just as it was to learn about Japan from your perspective.

As we bid farewell, please know that our doors are always open to welcome you back. The memories you created with my family, over these diverse and dishes, will forever be cherished, and the bonds we formed will remain strong across the miles.

With sincere gratitude and warm regards,

Mitu Rani Das, Bangladesh

ベンガル・日本語録

挨拶編

アッサラーム　アライクム	আসসালামু　আলাইকুম	イスラム教の方に対しての挨拶
ワアライクム　アッサラーム	ওয়া　লাইকুম　আসসালাম	↑の挨拶に返す言葉
ノモシュカル	নমস্কার	仏教、キリスト教、ヒンドゥー教の方に対しての挨拶
ドンノバット	ধন্যবাদ	ありがとう

会話編

バロ　アチェン	ভাল　আছেন	元気ですか？
バロ　アチ	ভাল　আছি	元気です。
アプナール　ナーム　キー？	আপনার　নাম　কি	あなたのお名前はなんですか？
アマール　ナーム　〇〇	আমার　নাম　〇〇	私の名前は〇〇です。
アミ　ジャパン　テケ　エシェチ	আমি　জাপান　থেকে　এসেছি	私は日本から来ました。
アミ　〇〇	আমি　〇〇	私は〇〇です。
アミ　〇〇　ポチョンド　コリ	আমি　〇〇　পছন্দ　করি	私は〇〇が好きです。
エタ　キー？	এটা　কি	これはなんですか？

おまけ
- チャットリ（女子）/チャットロ（男子）　ছাত্রী/ছাত্র　学生
- ジャパニ　আমি　জাপানি　日本人
- ガン　গান　歌

食事編

モジャ	মজা	美味しい
〇〇　デン	表記不可能でした。	〇〇ください。
エクトュ　デン	ごめんなさい…	少しください。

パニ	水
トルカリ	カレー
コラ	バナナ
ルティ	ルティ
チングリマース	海老
カチャモリッチ	青唐辛子

BDPスタッフの日本語

問題ない
早く行きましょう
また会いましょう
お茶
ちょっと

BDPスタッフの皆さんが日本語をたくさん覚えてくれています。日本語が聞けると安心します！！
「ない」と「ちょっと」は日本語とベンガル語が同じ意味を持っているので便利です！是非使ってみてください！

参加者感想

帰る場所がある幸せ

横須賀学院小学校　教頭
山口　旬

ドラえもんの道具で一番欲しいものはなあに？

よくよく現実的に考えるとほとんどいらない。というか無い方がいい。タケコプターは危険、高いところ怖いし落下者続出するし絶対危険。どこでもドアで電車バス飛行機廃止、歩かなくなり足退化。ビッグライトもスモールライトも、とりわけ通り抜けフープなんて犯罪以外に使い道無し。

その中でほんやくコンニャクだけは世界平和にも人類的にあるといい。それが現実になっている。スマホなどの翻訳ツールが出現。いま環境さえ整えばそれは実現する。

バングラに10数年ぶりに来てみれば猫も杓子もみんなスマホ。あっちもスマホこっちもスマホ誰もかれもがスマホ。若い子はみんなスマホ。リキシャ乗りですらスマホ。だからすぐに検索なんでも検索、音楽もすぐに音源ゲット。

かつてスタディツアーの出し物と言えば劇でした。夕方からチョキチョキ工作して台詞練習して学芸会みたいにキャッキャ言いながら過ごす。廊下には人があふれひたすら語り合い。
いまはスマホあるから部屋の中にいても退屈しない。Wi-Fiないだろと思ったらダウンロードしてきてアニメ見てるし音楽聴いてるし撮った写真加工してるし。オイオイなんだこの世界。昭和のおじさん世代はついていけません。

何かが便利になると何かが失われる。世の常とは言いながら一抹の寂寥感あり。

でも本質は変わらない。のび太だってドラえもんの道具が欲しいんじゃない。ドラえもんそのものにいてほしいんだ。結局大事なのは生で触れ合う友達なのだ。翻訳ツールがなくとも絆はできる。

久しぶりに戻ってきてそれを実感。片言会話でも心は通じ合う。

*

ここ10年間は母親の介護とコロナやらでそもそも旅行というものに縁のない日々を過ごしていた。前のパスポートを見るとどうやら前回バングラに来たのは2015年、スタディツアーは12年ぶり8回目。かつて若々しかったBDP　スタッフもそれ相応にフケていた。多くはとってもモタ。ジャマルのスタッフはみんな頭が寂しくなりバシェットはヘナでオレンジ髭に。アイドルだったオモル家のオヨン&オルゴ兄弟がイケメン青年になっている。

異国バングラの地に仲間がいて互いの成長を祝って笑顔になれる。

また来たねを超えてお帰りと言ってくれる。ここに帰る場所がある。こういうのを幸せという。

*

MFや女性クラブで一か月かかって織ったノクシカタが500～1000タカ。かたやアーロンで数千タカを余裕で使う我ら。スーパーで爆買い後に物乞いのおばあさんと目が合ってしまった。途上国には物乞い組織が存在するのは周知だが気になって仕方ない。これで道の向こう側を通ったらレビ人や祭司と同じだ。ここでスルーしたら寝つきが悪い。夢に出そう。絶対後悔する。結局我慢できずいくばくかのお金を握らせた。なぜ？　賛否両論あるけど出会ってしまった以上ほっとけないだろ。

最後は知識云々ではなく自分の気持ちに忠実に。これが神さまのご計画。そう納得できる心を信仰というのかな。

「ずっと思い続けること」

東洋英和女学院小学部　教員
鈴木　康之

「バングラディッシュに行って、何をしたいのか？また、何ができるのか？」準備会の時、山口旬先生の質問に、私は、答えるすべがなかった。私は、何をするためにバングラへ行こうとしているのか？
自問自答しても答えが見つからない。この夏休みに、バングラに行くことを友人に告げると、殆どの人は、「バングラに何をしに行かれるのですか？」と問われる。バングラは、観光地でもなく、
書店に行ってもガイドブックは、見当たらない。バングラの中心地、ダッカに行っても、ほぼ観光客はいない。みんなバングラの現地の人だけである。確かに私は、一体何をしに行くのであろうか?
「物資援助？」これは、上から目線であるし、「アジアから学び、それを通して私たちの生き方を真剣に考える」は、ちょっとカッコ良すぎる。「バングラディッシュに行って、何が出来るのか？」それは、「日本に帰国しても我々に出来ること、それは、バングラディッシュに行って出会った人々のことを、忘れることなく、ずっとずっと思い続けること、バングラに思いを馳せること、それが、いちばん大事なことなのです。」と山口先生は、おっしゃっていた。バングラデシュで出会った人々のことを忘れない。そして特に、キラキラと輝くきれいな瞳が印象的だった子ども達との出会い、願わくは、もう一度その子ども達と再会したい。今はその気持ちでいっぱいである。もしその願いが叶わなくても、私は、これからもずっとずっとバングラのことを思い続けていきたい。バングラディッシュの子ども達の美しすぎる瞳に乾杯！

バングラデシュと向き合いたい

国際基督教大学4年
山田　明日見

スタディツアーでは、「バングラデシュならでは」とも呼ぶべき、印象に残る様々な経験をした。例えば、ツアー中のある日、参加学生の靴が壊れた。それを知った現地の小学校の先生が、その場で自分の靴を脱いでプレゼントしてくれた。

また、出会った多くの人々が、初対面でまともに言葉も通じないのに、家に招待してくださった。日本人なら「言語も通じず、招待すると逆に迷惑なのでは」と躊躇するかもしれない。しかし、バングラデシュは、「人が来てくれることが、とにかく嬉しい」という喜びを伴ったホスピタリティにあふれているようだった。そして、まともにコミュニケーションをとれずとも、彼らのシンプルな喜びをもった招きは、私たちを幸せな気持ちにしてくれた。

こうした現地の人々との温かい交流は、素敵な贈り物だった。しかし、2回目のスタディツアー参加者として今回意識したことは、きれいな物語ばかりを追って、バングラデシュを美化してしまわないようにすることだ。

バングラデシュで見た一つの現実は、ジェンダーギャップだった。女性は常に一歩引いた位置にいる。キッチンに立つのはいつも女性だ。スタツア参加者と現地スタッフが歌やダンスを楽しんでいる時、キッチンの女性たちは部屋の外から眺めている。中に招かれることは決してなかった。

社会的地位の違いから来ると思われる差別もあった。私たちの身の回りのお世話をしてくれていた人々が、上司に文字通り「使われる」瞬間を何度も目にした。一度、そうした人が、上司にからかわれ、いじめられているとも取れる状況に遭遇した。周りにいた少なくない数のスタッフは皆それを笑い、彼らの無意識の差別意識が露呈されたようで、心が痛んだ。

こうした格差や差別を目にする度に、自らの立場もあいまって、複雑な気分を味わった。同じ女性でありながら、バングラ社会から外れた「外国人」というカテゴリーにより、私は差別を経験しない。また、人々が「使われる」のは、私たちスタツア参加学生をもてなすためであった。こうした事実に非常にもやもやした。

そのなかで、希望を見たように感じたのは、女性クラブを訪れた時である。そこで活動するのは、ジェンダーと障がいにより差別を受けてきた女性たちである。しかし、彼女たちは自信にあふれ、優しさを持って接してくださった。社会的に弱められている彼女たちが、共にしなやかに社会へ働きかけている姿に勇気づけられる思いがした。

私自身も、「外側の人」だからこそできることを少しずつ実践するようにした。キッチンの女性に毎食後感謝と感想を伝えること。キッチンの女性が文化交流の時間を楽しめるよう、部屋の中に彼女たちのための席を用意すること。「外国人」だからこそ許されるのかもしれない、バングラデシュ社会の「秩序」への小さな抵抗を行った。

しかし、バングラデシュの様々な「現実」にどのように向き合っていくのか、まだ決めかねている。だが、私はまたバングラデシュを訪れる。これからも、この社会の人間味のある温かな交流を愛しつつも、「もやもや」をしっかりと感じつづけたい。そして、バングラデシュ社会との関わり方、自らの行動の取り方を考えていきたい。

「同じ」と「子どものために」

立教大学4年
宮内 しおん

BDPスタッフや訪問先の方々、そして今回の参加メンバーと出会えたことをとても嬉しく思っている。話す言葉も宗教も障害の有無も年齢も…私とは異なる人々と出会い、その「違い」に驚くこともあったが、それ以上に「同じ」がたくさんあることに気付かされた。野菜や魚は日本で食べている物と似ている物も多くある。「ちょっと」は日本語でもベンガル語でも同じ意味だ。笑顔でいたら楽しいし、美味しいものを食べたら嬉しくなるのはみんな同じ。みんな神さまにつくられて、神さまに愛されている同じ人間だと感じることができた。「違い」の方が「同じ」よりも目につきやすいのは事実だけれど、よく見たら数えきれないくらいたくさんの「同じ」があった。自分と「違う」と思うから、興味深い反面、少し怖さを感じる。それがきっと差別や争いにつながる。しかし、「同じ」に気が付くことができたら、怖くはないし、友だちだと思うことも容易になるのだと感じた。そう感じることができたのは、BDPスタッフをはじめみなさんが私を温かく受け入れてくださってたからだと思う。

この出会いに感謝すると同時に、これまでの出会いに自分が感謝しているか考えさせられた。バングラで私たちのことを待っていてくださった方々がいたように、私のことを待っていてくれた人がいるにも関わらず気にも留めなかったり、当たり前のように身近にいる人とのつながりを大切にできていなかったりする自分がいる。今回の出会いだけでなく、これまでの出会いも大切にしたいと心から思う。

普段日本で子どもたちと接したり教育について学んだりする中で、「子どものために」という思いは、彼らを私の利益や保身のために利用してしまうことではないかという怖さを感じていた。また、スタツアの準備会でも、子どものために、バングラの人のために私たちにできることは何もないと言われ、その通りだと思っていた。しかし、訪問先の小学校で歌ったり踊ったり日本の遊びを紹介したりするメンバーの姿を見たり、シェアリングをしたりして、みんな目の前の子どもたちに少しでも楽しんでほしいという思いを持っていると感じた。一方私は、「子どものために」に否定的になりすぎて、子どものために何かしようという思いを忘れてしまっていたと気付かされた。全てが自分のためになっていた。子どものために私ができることなんて何もないかもしれない。しかし、「子どものために」を利用してしまうのではないかという思いと、私も子どもたちと同じ、神さまにつくられた存在であることを忘れなければ、「子どものために」を文字通りの意味で実現することが、私にもできるのではないかとこれまで抱いてきた不安が軽くなった。いつか本当に「子どものために」働けるように、これからも学び続けていきたい。

和歌山大学3年
塚本　結基

ワンチャン生き方見つかった

私は、スタディツアーに参加する直前まで、シェアハウスで暮らしながら農業アルバイトをしていました。そこで出会う人々は皆魅力的で、学生生活の中で出会うことはまずないような人々でした。会社組織のしがらみから抜け出した人や、地元の先輩後輩のしがらみから抜け出した人、大学卒業後当然のように旅人になった人など、色々な人がいました。皆、毎日をとても楽しそうに生きていましたが、私はその生き方に何か物足りなさを感じていました。そして、このスタディツアーでそれが何なのかに気づくことができました。

バングラデシュでは、各地の学校や、少数民族の住む地域、女性クラブにラルシュなど、様々な場所を訪問しました。そんな中で私の心を惹きつけたのは、社会の中で弱くされた人々のために働く人たちでした。BDPのスタッフたち、テゼのブラザー、女性クラブやラルシュのみんな。貧困や性別、障がいなどのために社会的に弱い立場にある人々が、自らの力で人生を歩むことができるように、「共に生きる」人たちがいました。特に、障がいを持った人たちとみんなで共同生活をするラルシュには、感動しました。ともすると私たちは、弱い立場の人には、手を差し伸べて「あげる」という上からの態度になってしまいます。しかし、本当にその人に寄り添うのであれば、目線を同じにして、同じ方向を向いて共に生きることが大切なんだと、ラルシュの人たちを見て感じました。そして、私もまたこのように生きたいものだと思いました。

私はシェアハウスで、真に自分の幸せを追求できる人たちの中で生活をし、そんな生き方に憧れを持っていました。しかし一方では、自分にはこの生き方は難しいとも思っていました。そんな中スタディツアーに参加し、何となく自分に合った生き方が分かった気がします。

答えのない疑問に向き合うこと

フェリス女学院大学3年
石川　芽生

今回のスタディツアーは私にとって答えのない疑問に対してとことん向き合う濃密な期間であった。

このスタディツアーに参加した理由は「貧困に置かれている人々の生活を自身の目で直接見たいから。」であった。しかし実際バングラデシュに訪れて「生活は苦しいがそれでも笑顔が絶えない人」や「ボサボサの髪で道端に寝ていた少女」に「物乞いをする人々」と、「貧困」と一言でいってもそこには多くの水準が存在することを改めて認識した。またそれと同時に「では豊かさとはどのような状態を指すのだろう。」と疑問がわいた。この疑問は期間中に毎晩行った「シェアリング」の議題にも挙がり、皆各々が感じる「豊かさ」について、時には反論も交えながら話し合っていった。そしてこのシェアリングを通して分かったことは「明確な答えなどない」ということであった。各々が感じる「豊かさ」が答えであり、それを無理に一つにまとめる必要はないのだと感じたのである。この答えのない疑問は「貧困問題」だけでなく、「バングラデシュのゴミ問題」や「男女格差」など、10日間で多くの疑問にシェアリングを通して向き合った。

この答えのない疑問に対してゆっくりと時間をかけながら考える作業は、ひとり頭の中で悶々と考えることはあっても、複数人と一緒になって考えることは「タイムパフォーマンス」や「効率」に重きを置く日本での生活ではなかなか味わえないものである。しかし私はこのシェアリングというコミュニケーション方法が、結果的には答えのない疑問に対しての解を導く一つの方法でもあるのではないかと今回のスタディツアーを通して感じた。シェアリングでは今まで自分が持たなかった思考や感覚を聞くことができ、自分の見聞を広げることができる。また、様々な意見あるいは各々の答えをすり合わせ、複合することによって新たなアイデアが生まれる可能性もある。こうしたアイデアの積み重ねにより、最終的には答えのない疑問に対しての解を出せるのではないかと考える。

このように今回シェアリングを通して、答えのない疑問には「明確な答えを出さなくても良い疑問」と「明確な答えを出さなければいけない疑問」があり、特に「明確な答えを出さなければいけない疑問」に対してシェアリングは効果的であると私は考えた。何か一つに時間をかけるということは、今の時代なかなか持てない状況となっているが、そのような状況下であるからこそ時間をかけ、歩み寄り、一緒に考えていく作業が、混沌と化していく今の時代に必要なのではないかとこの10日間を過ごして思った。この考えを含め、今回スタディツアーにおいて直接見たこと感じたことを忘れずに、これからも自分の見聞をより広げていきたいと思う。

10日間で感じたこと

フェリス女学院大学2年
阿久根　里奈

私は今回のスタディーツアーで、本当にたくさんのことを感じ、学ぶことができました。私にとって、今回のバングラデシュが人生で初めての海外で最初は少し緊張していました。そんな中、私がこのバングラデシュのスタディーツアーに参加した理由は、貧困問題に興味を持っていて、実際に自分の目で現状を見て、現地に足を運んでみたいという思いがあったからです。そして、自分に何ができるのかを探したいと考えていました。このような思いで参加したスタディーツアーでしたが、実際に現地に行くと、みなさんすごく楽しそうに暮らしていて貧困という問題をあまり感じませんでした。確かに日本とは生活水準がまるで違い、日本に住む私たちから見ると、大変そうでかわいそうと思ってしまうかもしれません。しかし現地で生活する人たちはあの環境が当たり前で、みなさん笑顔いっぱい楽しそうに暮らしていました。そのため、外に住む私たちが、どうにかしてその状況を変えてあげたいと考えるのは違うなと感じました。これからは、自分に何がしてあげられるのかと考えるのではなく、現地の人たちと一緒に何ができるのかという共働という考え方で、この先活動していこうと思いました。
そして、もう1つバングラデシュに行ってとても感じたことがあります。それは、子供たちの勉強に対する意欲がとても高いことです。私は、日本の子供たちよりも明らかに高いなと感じました。これは日本の子供たちの意欲が低いからそう感じるのではないと思います。きっと日本とバングラデシュの意識の違いだと思います。日本の子供たちは高校や大学に行くことが当たり前という中で育つ子供が多くいます。しかしバングラデシュではそうではありません。いくら勉強したくても大学までは行けない子供たちがいます。私は、バングラデシュでたくさんの子供たちに出会いました。その子たちに将来の夢はあるかと聞くとほとんどがあると答えました。そんな夢を持って頑張る子供たちを、どうしたら応援できるのか。まだ答えは出ていませんが、これからたくさん考えたいです。

この2週間で出会ったみなさん、本当に温かい人たちばかりで私はバングラデシュが大好きになりました。また絶対に行きたいです。

バングラデシュスタディツアー

専修大学2年
野島　丘

私がこのツアーをどうして様々なことを学んだ。

まず、1つ目は、人の温かさや、
日本人に対する関心の高さである。このツアーの間BDPスクールに通学する学生や、BDPのスタッフ、町や村の人々などの性別にや職業が異なると関わることができた。その中で全員が共通していたのが、温かさや、日本人に対する関心の高さである。日本人にとっては、初対面の外国人に対して積極的に話をしたりするのは難しものである。しかし、バングラデシュ人は、積極的に話しかけにきてくれたり、こちらから話しかけても気さくに返してくれたりと、バングラデシュ国民の温かさを知れた。また、BDPスクールでは日本に関心のある学生が多く見られ、日本の歌を日本語で覚えている学生や、折り紙を折ることができる学生など日本に対する関心の高さが窺えた。

2つ目は、宗教があることで生まれる一体感である。私は、今までの人生で深く宗教に関わったことがなく、今回のツアーで初めて礼拝などを行った。最初は違和感があったが時間が経つにつれ慣れることができた。また、ラルシュに訪問した際には、言語も自身の母国の文化も違う人々が同じ時間、同じ場所で、同じ神様に祈りを捧げているという状況に圧倒され、心地よさを感じた。さらに、このツアーの間、夜にシェアリングをおこなったときも、年齢や、生活している環境、などが異なるツアーメンバーと感じたことを共有したことで、自分だけでは見ることができなかった側面でその日の振り返ることができた。また、その日の振り返りだけではなく、「豊かさとは何か」などの個人によって答えの異なる問題に対して議論することで、より深い議論を行うことができた。

私はこのツアーで、いろいろなことに触れ、考えることができた。だが、重要なのはこの経験を共有することにあると思う。今回の報告のような大きな舞台での報告だけではなく、友人に話したりなどの規模が小さい場でも共有すしていきたいと思う。

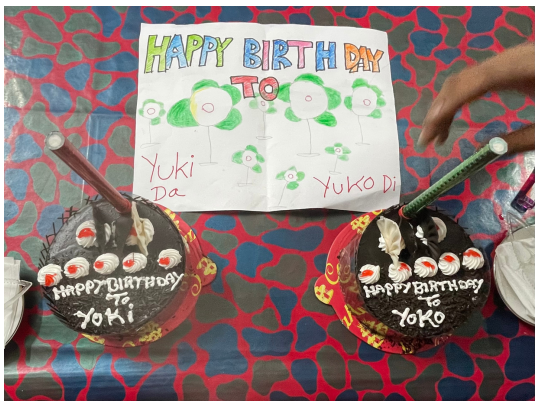
この花が開くには

横須賀学院高等学校2年
大野　ゆかり

私が今回心の中にずっとあり続けた言葉があります。それは「スタディツアー」私たちが学びに行くことです。そしてそこでタネを持ち帰りその蕾を膨らませ、開花させるところまでがこのスタディツアーというものなのだと個人的に認識しています。それではその開花させるまでの行程、行動はどうしようかというのは今考えても具体的には出てこないのが現状です。一番の学びは自分の人生の中でも心臓に突き刺さるような風景を見たということです。ただその中には子供たちの純粋で無垢な目、自分たちの国の地にしっかりと足をつけ生きていこうとする、勢いや力強さを感じる目、それらは学校に訪問しているときであったり、車の中から見える景色等から感じ取ることができました。私たちが育った環境とは違う環境にいる人々から学んだことは自分のメモを見返すたびにその数の多さからも感じ取ることができました。私が日本に帰ってからはまずこれらの気持ちをダイレクトに周囲の人に伝えようと思っています。しかし、この段階は蕾が膨らむ程度です。バングラデシュの人々について思い、祈っても何が変わるかと言われてしまえば何も変わらないかもしれません。その上、この後自分が感じたことを活かして生きていくことができるのかと自分自身に問いかけてもどんな行動をしたらいいのか全く思いつかないのです。ただ、この自分自身にしか感じ取ることができなかった感情をこの先もずっと語り続けることしか思い浮かびませんでした。たさだ、もう一度この地に戻ってきたいなと、絶対に戻ってきたいなと本は気で私は思っています。その時には今ではほとんど分からないベンガル語を会話ができる程度までは勉強して、スタッフの方や地域の方とまたはお話をしに帰ってきたいなと一つ大きな目標を立てることができました。私がとても嬉しかったことの一つにみなさんの温かい歓迎があります。日本では「おもてなし」と言いますが、こんなにもたくさんの笑顔とともにしてくれたのはここがはじめてでした。

バースデーケーキと2万タカ

東洋英和女学院高等部2年
小久保　諒子



私はバングラデシュに着く前は、10日間も耐えられるかな？と、失礼なことを思っていた。けど、日にちが過ぎていくうちにここから帰りたくない、また来たい！と思っている自分がいた。私がバングラデシュに惹かれた理由の１つが、人の優しさと温かさだ。それを一層感じた一日がある。とても個人的なことなのだが、私はスタディーツアー中に誕生日を迎えた。その日訪問したLARCHでは、急にそのことを知ったのにHappy　Birthdayというカードをプレゼントしてくれ、とても嬉しかった。プーバイルの事務所に戻るとスタッフの方々がチョコレートケーキを用意してくださっていた。ケーキが食べられるとは思っていなかったのでとても驚いた。歌を歌い、みんなで美味しくいただいた。バングラデシュは冷蔵庫があまり普及していない。オフィスから街まで、わざわざ高価なケーキを買ってきて来てくださったことに嬉しくて感動すると同時に申し訳ないとも思った。出会って一週間位なのにめちゃくちゃ祝ってくれて、バングラデシュの人の優しさ、心の豊かさ、温かさを実感し、バングラデシュの人達はおもてなしのプロだなと思った。

私はバングラデシュの人達の目にも惹かれた。初めて小学校を訪問した日、歓迎してくれている人達のムードと子どもたちの目の輝きに圧倒された。輝いているのは子どもだけではなく、街の大人の目も輝いてみえた。子ども達からは学ぶ意欲を、大人達からは国の明るい未来を感じた。日本人の方が自分も含めて、便利な国に暮らしているにも関わらず、余裕がなく切羽詰まっているような顔をしているなと、思った。

私がこのスタディーツアーで一番印象に残ったことは、ＭＦで２万タカから事業を興すということだ。この金額は私がバングラデシュにお小遣いとして持って行った額と変わらない。この事実にバングラデシュの人達の逞しさと強さを感じるのと同時に、自分の無力さと小ささを知った。スタディーツアーから帰って何をするかが大切をおっしゃっていましたが、今私にはヘナタトゥーの残像をみてバングラデシュに思いを馳せることしかできない。また参加する機会があったら自分は帰ったら何をするべきなのか真剣に考えながら参加したい。

このスタディーツアーは私に多くの学び、気づき、人生を豊かにするヒントを与えてくれた。今回の経験を他の人に伝え、分かち合う度に、自分の心にも刻んで行きたい。

幸せのかたち

東洋英和女学院高等部2年
角田　美光斗

このスタディーツアーは私に「幸せとはなにか」という問いを与えてくれた。そもそも、私がこのツアーに参加したいと思ったのは「押し付けがましい自分の価値観を変えたかった」からだ。自分は今まで友人や環境に恵まれすぎていた自覚があり、途上国を訪れることで自分の今ある状況に感謝できるのではと考えた。正直自分の置かれた環境を理解をしているだけ、私は偏見なく客観性のある人間だという自信があり、それ故「途上国」と名の付いた国を不幸だと見下し、自己肯定感のために利用していることに気が付かなかった。

しかし実際にバングラデシュを訪れて目に止まったのは想像以上に明るく、笑顔に溢れ、私達を歓迎して下さる人々の姿だ。はじめは、異国から来て文化も言語も違う私達をバングラデシュの人々が受け入れてくれるか大きな不安があったが、暖かく出迎えていただき、町に出てもお互いを助け合ったり声をかけあったりしているバングラデシュの人々の様子を目にして想像に反して幸せに溢れていることを感じ衝撃を受けた。

贅沢なほどのもてなしをされる日々で見たこともない国を一方的に幸せではないと決めつけていた自分を反省し、シェアリングでは豊かさとはなにかを討論した。確かに物乞いの方がいたり、街がゴミで溢れていたりと日本人の感覚からすると改善するべき問題は多いと思う。しかし、それだけの理由で不幸だと決めつける自分が最も不幸な価値観の持ち主だと後悔し、日本とバングラデシュのどちらが恵まれているのかわからなくなり正解の答えを出す必要があるのかさえ疑問を抱いた。今でも自分の中で結論は出ていないが、ただ一つ確信できるのはバングラデシュの人々のほうが「人を幸せにしようとする心」が強いということだ。私には彼らのように異国から来た人々を素敵な笑顔で迎え入れる心の余裕はなく、優雅な歌やダンスでもてなそうという気持ちすら生まれないだろう。テゼではブラザーのラファエルさんに「一緒に過ごすことが重要」と教えていただき、豊かさ＝幸せではないけれど豊かになる要素の一つに幸せが含まれると学び、物質的な豊かさに囚われていた自分に気付いた。さらに、章子さんになぜバングラデシュの発展が遅れたのか伺った際に、他国から経済的な支援しかされなかったからと教えていただいた。私はこの支援方法は国の内情を顧みず各国が己の満足感を満たすために援助した結果と捉え、まるで以前の私のようだと感じた。一方的な価値観で幸せのかたちを決めることの愚かさ、どのような形でも他人の幸せを受け入れる姿勢の重要性に気付いたことが今回私が得た最大の学びである。

日本に帰ってきてから気付いたのは、出国前に私がバングラデシュに対して抱いていた「幸せじゃなさそう」という偏見を持つ人は他にも大勢いるということだ。現地に降り立った私だからこそその認識を訂正できるし、少しでも多くの人に伝える使命があると思う。しかし、このような気付きを与えてくださり沢山の素敵な経験をさせていただいたバングラデシュに対して今できることが何もない。もし私が大人だったら、もしもっと多くの視点を持っていたら役に立つことがあるかもしれないと考えると自分の無力さを悔しく感じてしまう。だからこそ、私はもう1度バングラデシュを訪れたい。今はまだ世間知らずの高校生だが、次回訪問するときまで沢山勉強して次はより多くの学びを得たいし、いつか本当に誰かの役に立てるようになりたい。

これから何しよう

東洋英和女学院高等部2年
渡邉　遙香

日本に帰国して数日は家に籠もり広大な睡眠世界を駆け回るに余念無かったが、先日某スタツアメンバーから漫画「キングダム」を勧められたので「たまには外出るか」と図書館に向かった。

司書さんに「７０巻弱ありますけど全部読むんですか」と言われ、「そんな超大作なんて聞いてない」と絶望したが、読み始めたら面白過ぎて止まらなくなり、借りて家で読みたかったが両親に見つかったら窓から捨てられ成績向上を誓わされる可能性があるので、この万巻の漫画を今日中に読破するという目標の元、一心不乱に読みまくった。

さすがに疲労を覚え、気がつくと４時間たっていた。全巻読めなかったが楽しかった。司書さんに「家帰ったほうが良いんじゃないですか」と半ば呆れた顔で言われた。

午後を丸々潰して中国史の勉強にいそしんだ達成感と世界が二次元に見えるような錯覚を覚えつつ帰宅していると、澄んだ夏の空に綺麗な半月が浮かんでいた。兎が真っ二つだ、とぼんやり眺めつつ、漢文の授業で習った白氏文集の詩を思い出した。作者の白居易が中秋の名月を見て遠く離れた友人を心配する詩だ。

私も心配する人たちはいるかと考えると、スタツアのメンバー、バングラデシュで出会った子どもたち、BDPのスタッフなど、沢山の人たちが思い出された。「想像力は愛」なら、私は今バングラデシュの人たちを「愛している」ということで良いのか。彼らも私達のことを考えてくれていたら嬉しいな、子どもたちも先生もみんな元気かな、あっちに帰るまでにスタッフの誰か死んでたらどうしようとあれこれ考えているとあまりの寂しさ、恋しさ、心細さに涙が出た。手でぬぐったら月の光に照らされてヘナタトゥーが見えて、それでまた泣いた。

私は今回のスタディーツアーで沢山の人生の糧を手に入れることができた。将来の目標、自分が孤独だと感じた時に帰ることができる場所、友達etc。どれも私が欲しかったものだ。というか自分が将来苦しくなった時に頼れるものができたという意味で、ただの自己完結である。ダッカで物乞いのおばあさんから鍋つかみを買ったのは少しでも長く生きて欲しい、助けたいと思ったからなのに、もし私が何か支援するとしてもできることは微々たるものだし、これ私の人生だし、と考える自分もいてフラフラ矛盾している。私は人の役に立ちたいと思うほどよくできた人間ではない。元々内向的で、人の気持ちを想像するということが苦手な性格だ。およそ自分のことで精一杯である。

しかし、そう自虐で突っぱねることもできるけれど見てしまったものは振り切れないとこれからもバングラデシュに帰って何かしらの支援に携わりたい、「一隅を照らす」存在になりたいと思うし、月を見たり本屋さんでキングダムの新刊を見かけたらまたバングラデシュの人々やスタツアメンバーを思い出すのだと思う。

この文章を記述している今も、ヘナタトゥーはすっかり消えてしまい（赤いマッキーで上からなぞったが無駄だった）残されたのは蚊にさされくらいだが、またいつかバングラデシュに帰れると思うと嬉しくて、お土産のマンゴーバーをネチャネチャやりながらニヤニヤしている。

今年の中秋の名月は９月２９日らしいので、チャイを沸かしてお月見したい。

本当の「豊かさ」とは

東洋英和女学院高等部2年
尾崎　綾音

ツアーに参加する前の私にとって、世界に蔓延る貧困問題は他人事であまりに不明瞭だった。環境に恵まれ、周囲の人にも恵まれている自分の現状を自覚していたし、その状況を崩さないように必死で、発展途上国を「可哀想だから支援している」と見下して、「日本にいる自分は豊かで幸せだ」と思い込んでしまっていた。しかし、その愚かな考えを変えてくれたのは、バングラデシュでの経験とスタディツアーを通して出会った方々だった。
実際にバングラデシュを訪れて、「可哀想」という雰囲気は感じられなかった。BDPスタッフも、BDP小学校の子どもたちも、訪れる先すべての人たちが、私たちを暖かく迎え、たくさんもてなしてくださった。確かに、日本とは生活水準が異なるし、実際物乞いの方に遭遇したり、インフラが整備されていない様子を何度も目の当たりにした。それは紛れもない事実で、決して思い出で美化してはならないものだとは思う。けれども、日本で生きてきた私の見解を押し付けてしまっているような気もした。バングラデシュの方々は私たちとは異なる環境や与えられた役割の中で感じる幸せがあるのではないだろうか？と感じた。その状況を勝手に「可哀想」だと決めつけて「支援してあげる」と上からの立場で物事をとやかく言うのではなく、ともに考え、ともに生きていくことこそ、互いの成長に繋がるのだと気づくことができた。
また、バングラデシュの方々や環境だけでなく、スタディツアー参加メンバーからも多くの気づきを与えられた。一日を振り返るとき、一つの言動や出来事を手にとっても、様々な意見が出てきた。まさに「十人十色」で、疑問に思うこともフォーカスする部分も人それぞれだった。真反対の意見が出てきて、シェアリングが白熱して深夜になってしまうことも多々あった。しかし、その時間からしか得られない色々な価値観や視点があったと思う。きっと私一人で来ても気づけなかったであろうことにメンバーは気づかせてくれた。
これらの経験や出会いを通して、自分の視野の狭さを実感させられた。また、周りから目を背けて狭い世界に囚われている私たち日本人は、本当に豊かといえるのだろうか？と考えさせられた。経済面など、目に見える「物質的な豊かさ」は日本にはあるかもしれないが、どこか利己的で心の余裕がない私達には、きっと「精神的な豊かさ」が足りないのだろう。少なくとも、自分が豊かだと思い込んで、問題を見て見ぬふりをしながら狭い世界に籠もってきた私は、「豊かさ」から程遠い存在であり、「貧しい」人間だと思えた。
いつでも笑顔で、他人を想う気持ちが強い、「隣人愛」そのものであるバングラデシュの方々のほうが、よほど「精神的な豊かさ」に恵まれていると思えた。その「豊かさ」を見習いたいと思ったし、見習うためにもっとバングラデシュについて知りたい、またバングラデシュに行きたいと思うことができた。
スタディツアーに参加して学んだ、私たちの「貧しさ」、バングラデシュの「豊かさ」や魅力、そしてその中に存在する向き合わねばならない大きな問題を、少しずつでも広めていくことが私に与えられた役割だと信じ、今回感じたことを共有していきたいと想う。

つながり

山梨英和高等学校2年
大久保　結

バングラデシュから日本に帰国し、「バングラデシュは楽しかった？」、「どんなことをして毎日を過ごしたの？」などと周りの人から質問をされる。しかしこの質問に続いて「やっぱり日本より貧しくて何もない国だったでしょう？」、「過酷で不便な生活だったよね？」、「もうバングラデシュへは行きたくない？」とバングラデシュに対するマイナスなイメージを持った質問も必ずされた。しかし私はその質問に「はい。とても過酷でした。しんどかったです。」と答えたことはない。私は質問をされる度、バングラデシュはそれほど生活しづらい国だったのだろうか？、日本はバングラデシュよりも良い国なのだろうか？と疑問が募ってゆく。日本に帰ってきた今の方がバングラデシュについて考えているような気がする。

スタディーツアーの準備会でバングラデシュに対するイメージを挙げたことを思い出した。「ジュート」や「イスラム教」などバングラデシュの特色をイメージするものに加え、「汚そう」、「何もなさそう」というような意見もあった。そして私もその意見に共感していた。しかしバングラデシュへすでに行ったことがある参加者は、「人が温かい」、「探究心がある」と言っていた。私はそれに対し、バングラデシュを美化しているのだろう、価値観が違う人なんだろうと思っていた。

ダッカ空港に到着したと同時に道路に鳴り響くクラクションの音を聞いた。宿泊先では、トイレの真横のコンクリートで水浴びをしたり、壁に沢山のヤモリが張り付いた部屋で寝て生活をすることを知った。初めて見る衝撃的な光景や受け入れ難い文化が沢山あった。ここで私は生活できるだろうかと心配や不安を感じた。しかしそれを拒否せずに受け入れたいと思う前向きな気持ちががなぜか心の中にあった。

バングラデシュでは毎日、日本では感じることのないような人の温かさを感じた。バングラデシュの道は整備されていないため雨が降るとすぐに土がぬかるんでタイヤがハマってしまう。土にハマった車を助けるため、周りの人がどんどんと集まり、力を合わせ、車を押し動かす様子を見た。知らない人が困っていたら、自分が運転していても車から降りて共に解決する、そんな光景は日本で見たことがなかった。

道路が整備されていない暮らしは不便である。しかし何か問題があると、キャリアカーのようなものや警察に頼るのではなく、そこに住む人々で解決をする。困難を人と人の関わりの中で解決することによって人々は活気のある温かい関係を築いていたように見えた。日本はこんなバングラデシュの環境と真逆であるように感じる。スタディーツアーに参加する前は日本の方が良い生活だと思っていた。しかし「どちらの国が勝っているわけでも劣っているわけではない。」と私は思う。どちらの生活もその国の環境に適した形となり、その地の人々によってそれが受け継がれていく。

先進国が途上国に資金と技術を提供しどんどんと開発をしていく。とても良い取り組みだ。しかし今のバングラデシュには必要ないと感じる。便利な暮らしでない、整った暮らしでないからこそ人と人が繋がり助け合う。そんな環境が心地よく感じた。

豊かさとは

広尾学園小石川高等学校2年
徳竹　優子

私は「貧困」というイメージがあるバングラデシュには、少なからず「可哀想だ」という偏見を持っていた。しかし、このスタツアを通して私の考えが180度変わった。そのきっかけとなったことがある。

それは「豊かさとはなんだろう」と考えたことだ。バングラデシュを訪れるまではお金をたくさん持っている人が豊かなんだろうなと漠然と想像したことしかなかったし、考える機会もあまりなかった。なのでシェアリング時に投げかけられたこの質問に私は答えることができなかった。けれども、議論していくうちに豊かさには「物の豊かさ」と「心の豊かさ」の二つに分けた考え方があることを知った。初めてその考え方を理解し、その日から私たちに関わってくれる現地スタッフや目が合うと微笑んで手を振ってくれるベンガル人の「心の豊かさ」はどのくらいなのだろうと気になった。それと同時に私たち日本人はどのくらい豊かなのだろうと考え始めた。

物に恵まれているけれど、学校や仕事に追われておりせかせかしている日本人。その一方で物は少ないものの、とても優しくて温かいベンガル人。そう感じることが現地での生活では多かった。道端で泥穴に落ちてしまった時、通りすがりの方が家の水道を貸してくれたり、MFで出会った女の子は私が泥にはまらないようにずっと手を繋いで安全な道を教えてくれたりした。ほかにも環境が素晴らしいとは言えない学校で目を輝かせながら学ぶ子ども達。私たちをお家に招待してくれたタバジョさん。たくさんの人と出会い、一緒に行動し、たくさんの笑顔を見るうちに「ああ、幸せそうだな。心が豊かなんだな」と感じることが多くなった。スタツア後半になってくるにつれ、私は日本にいた時やこれからの自分について考える時間が増えた。バングラに来る前に学校の照明や給食、十分な文房具など私たちにとって当たり前なことだと考え、感謝せずつまらない顔をして学校に通っていたことを後悔した。今挙げたものの中にはバングラでは当たり前ではないこともある。「物の豊かさ」に頼り、何も考えずに日々を過ごしていた。数えきれないほどたくさんの人に支えられて生活を送っている。そんなことを気づけたこの経験を無駄にしてらいけない。豊かではないことを誰かのせいするのではなく、まずは自分の側にあるものを見つめ直していきたい。

このスタディツアーではたくさんの「初めて」を経験させてもらい、常に何かを考えさせられていた10日間だった。シェアリングや現地での生活を通して納得できたこともあれば、未だ自分の中で答えを生み出せないこともある。でも、考えることをやめず、少しでも多くの人にバングラデシュで見たことを発信したい。そして、当たり前なことに感謝する。それが今私にできることだ。

価値観の変化

共愛学園高等学校1年
石原　采夏

このツアーを通じて、私は沢山の貴重な経験をした。BDPの学校を訪れ、子どもたち、先生方、そして村の人々から大歓迎を受けたことは、心から嬉しいと感じた良い思い出だ。特に、テゼ、女性クラブ、ラルシュなどで感じた人々の喜びと歓迎の気持ちは、私たちの訪問が意味のあるものであることを実感した。

私は、バングラデシュでの経験を通じて、貧困の中に置かれた人々との関わりの重要性を深く感じた。それは、日本が豊かであるからではなく、バングラデシュの人々を見てきて、どんな国や環境であっても、互いに支え合い、共に生きる思いが生きる理念としてしっかりとあるべきだと強く感じたからだ。また、日本に住む私も、バングラデシュの人々のように、隣り人として出会った人々との関係を大切にし、自らの弱さ、不完全さを補い合って共に歩んでいこうと決意できた。

このツアーは私にとって、過去の自分が持っていた偏見や貧困層・障がい者を見下す様な態度を反省し、そういった人たちと真に対等な関係を築くために自分自身を振り返る機会でもあった。そこから、1度自分の価値感や立場を捨て、相手と対等に接することで、「共に生きる」ことができるのかもしれない、そして、その揺らぐことのない土台にあるのが愛だと、自分なりに、自分が納得できる答えを出せた。

このツアーは、驚きと感動の連続で、気づいたときには終わっていた、と言えるぐらいあっという間だった。バングラデシュでの大地と人々との出会いは、私に将来の生き方や価値観を深く考える機会を提供してくれた。私の人生において貴重な変化をもたらしてくれ、本当に参加して良かったと思う。

ACEFスタディツアー考　その2

ACEF事務局長
柳原　さつき

今回は、私にとって2回目のACEFスタディツアーだったが、前回とは参加者の構成も人数もかなり異なり、事務局としても準備段階から昨年以上の緊張感があった。とはいうものの、その緊張感の中ですでに私にとっては期待感も高まっていたのだと、今振り返っている。7月に開催した一泊二日の準備会前後の参加メンバーとのやり取りもさまざま、当然各メンバーの参加動機もさまざまで、感心したり、驚いたり・・・正直不安もあったが、「今年のメンバーとのツアーも、またおもしろそう！」という期待感の方が強かったかもしれない。いつものように温かく迎えてくれるBDPスタッフが待つ現場に入ると、ツアーメンバーは皆本領を発揮。もちろん発揮の仕方やスピードは個々で異なるものの、「自分以外の参加者がすごく見える」と気おくれした様子のメンバーたちも、私から見たら、皆素晴らしかった。環境がガラッと変わり、体力的にも厳しいツアーの中で、皆がいろいろなことを見て、感じて、考えて、そしてそれを共有してということを繰り返す中で、答えにたどり着きにくい課題にぶつかったり、言葉に表現できない大切なものを得たり、日本を飛び出してみなければできなかった経験をしたと思う。かくいう私も、昨年に引き続き、この貴重な経験をさせてもらった。昨年はツアー直前に不慮の死を遂げた友人を強く思う瞬間がおとずれ、その日のシェアリングで自分の気持ちを吐露したり、今年はそろそろ介護が必要になってきた父親とのエピソードを話したくなって話してみたり・・・新しい、時にインパクトのあるバングラデシュでの経験を受け止めて、考え、話す・聞くという作業を、今回たまたま一緒になったメンバーと繰り返すということが、メンバーにとって、そしてそれを見守っているはずの私にとっても、得難い経験となって蓄積され、それを共有しているメンバーとの気持ち的な距離感が縮まっていくような気がしている。
これが、バングラデシュマジックなのか、ACEFスタディツアーマジックなのか、他のマジックなのか私にはまだわからず、他のスタディツアーにも参加してみて、比較してみたいなと思う今日この頃である。昨日も今日も、メンバーが事務所でボランティア作業をしてくれて、私はこの上なく楽しく幸せな気分にさせられた。昨年に引き続き、私をワクワクさせる、このACEFスタディツアーについて考えてみたが、また来年も引き続き考えてみることにする。（その3に続く・・・）

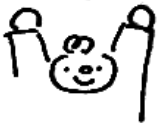
寄せ書き

目を閉じればバングラの地
思いうかぶは異国の友人
想像することこれ即ち愛なり
バングラロスのやまじゅん

シュンドールなみんなと
シュンドールなスタディツアー
でした!!
柳原 さつき

バングラの子どもたちの瞳、
最高でした!!

すずき 2023 9.12



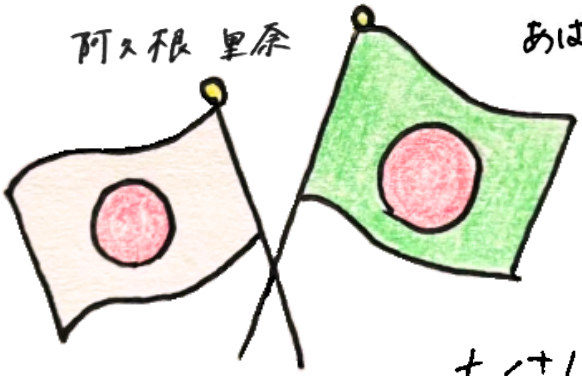
সবাইকে ধন্যবাদ !!

バングラデシュ
大好きになりました

阿久根 里奈

たくさんのすてきな
出会いに感謝!
あばーる でかほべ♡
しおん心

ありがとう
山田 明日見



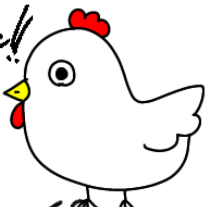
バングラデシュ、
すばらしい出会いを
ありがとう!

バングラの魅力
を伝え続ける!
石川 芽生

すてきな思い出
ありがとう!!
小久保諒子

たくさんの学びを
ありがとうございました!!
野島丘

塚本結基



沢山の学びをありがとう!
どんのばっと!! 角田美光斗

また行きます!
渡邉 遥香

一言では表せない程、
充実するツアーとなりました!?
大野 ヤカン

またバングラデシュの
人たちに会いに行きます!
さいか

たくさんの人に出会えた
幸せな10日間でした!!
徳竹 優子

沢山の新しい発見も、
みんなで共に考えた
2週間でした!
大久保結

素敵な出会いに感謝!!
また絶対に行くぞー!!
尾崎 綾音

特定非営利活動法人
アジアキリスト教教育基金

ACEF

〒169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18-26
TEL　03-3208-1925
Email　acef@acef.or.jp
Website　https://acef.or.jp